
フランソワが集めた話（短編集）

傘男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フランソワが集めた話（短編集）

【Nコード】

N0428X

【作者名】

傘男

【あらすじ】

かなり短い短編集。

それぞれの話に繋がりは特になし。

1 玩具王国

ある玩具屋の店長は最近自分の店の玩具達にひどく悩まされている。

いったい全体どういう訳か夜中に勝手に動き出し、パーティーと称して歌い、踊り明かし、店長はとうとうるさくて寝れず、最近凄く寝不足気味という訳だ。

店長はついに決心し彼らに文句を言おうと、ある夜、店の二階にある自分の部屋には戻らず店内で彼らを待った。

そしてやはり動きだす玩具達。

「お前達いい加減にしろ」

意を決し怒鳴る店長。

「ははは、僕らを不思議に思わない人間か」

玩具の誰かがそう言った気がした。

「お前達、いいか」

ゼンマイ式の玩具は誰かが巻いてくれないと動けない。

そう、店長は玩具になっていたのだ。

「ようこそ店長、僕らの王国へ」

不思議な事を不思議と思えないのは自分がすでに自身に不思議を感じているから、それだけは何より確かだから。

こうして不思議な何かは日夜増えていく

1 玩具王国（後書き）

なんで玩具になるのか、
気にすると負けです（笑）

2 幽霊少女

「なあ親友よ、お前って確か心靈現象とか詳しかったよな」
「まあわりとな」

ある学校のある学年のあるクラス。休み時間のある少年とその親友との会話。

「なあ実はこのクラスに1人幽霊、もしくは幽霊かも知れない子がいるんだよ」

「はい？」

真剣な少年に呆れた様子の親友。

「どこのだれ？」と親友。

「ああ委員長だよ」

「それ僕の勘違いかも知れないけど君の彼女じゃん」
今や完全にどうでもよさそうな親友。

「いや、間違いないって、なんていうか、彼女の近くにいと胸が痛いんだ、まるで何か、そうきつと魂がぬかれちゃってんだ」

「そうかそうか、で、それがどうかしたか？」

「それがどうしたって、ちょっと怖いんだ、本当に魂抜かれてたらどうしよう」

もはや言葉は返さず盛大にため息をつく親友。

「これだけは言っとこう、お前がひらがなカタカナで二文字、漢字なら一文字のある病気にかかってるだけだ」

そしてチャイムが鳴り休み時間は終わった。

2 幽霊少女（後書き）

こんな恋がある訳ない恋。

3 星を食べる怪物

昔昔の事。

とある丘のとある村はある問題を抱えていました。

その村では流れ星の迷信が強く信じられていて、誰も彼もが毎夜、夜空を眺めていました。

しかしある日を境に村では流れ星が見えなくなってしまったのです。それは丘から程なく離れた洞窟に住む、それはもう巨大なワニの怪物が村から見える位置に流れ星が来る前に、飛び上がってパクリと食べてしまうからでした。

村人達は困りましたが怪物が恐ろしく誰も事態を解決出来ません。しかしある時、ついに一人の勇敢な青年が村人達に怪物退治を約束します。

青年は野を超え、山を超え、ついに怪物の元へとたどり着きます。

怪物はのんきに寝ていました。

勇敢ではあっても、別に勇者でも聖者でもない青年は卑怯にも眠る怪物に剣を突き刺そうと構えます。がその時青年は怪物の大きな手の指の間にあつた三冊の本に気づき剣を持った手を一旦下ろしました。

本のタイトルはこの三つです。

「隕石の危険性について」

「本当に強い者がするべき事」

「誰かと友になりたいなら」

青年はそれから剣を怪物に突き刺す事なく、ただじっとしてました。しばらくして目覚めた怪物は青年の腰の納められた剣を見てひどく怯えた様子となりました。

青年はそんな怪物を小さな手でさすり、膝について言います。

「今までごめんね、ありがとう」

そして微妙に流れ落ちそうだった涙をぬぐって一言付け加えます。

「でもこれだけ言っておこう、君は壮大な勘違いをしてる」

3星を食べる怪物（後書き）

いい話と見せかけた喜劇のつもり。

4 音楽人

「思うんだけど俺達って音楽人だよな」

「何を言い出すんだ急に？」

「頭イったか？いや元からか」

とある学生スリーピースバンドの会話。いつものようにボーカル兼ギタリストの世迷い言に突っ込むベーシストとドラマー。

「いや、音楽人たるもの人より楽器をうまく弾けるだけでなく、有効活用しようと思ってな、例えばこのピック、これで何か出来ないかな？」

「何か一曲セツションしてみるか」

ギタリストを完全に無視しそう告げるドラマーにすぐさまベーシストも賛同し、ギタリストも仕方なく準備する。

「そういえば聞いたぜ、お前が発声練習で夜近所迷惑らしいって」
ふと友人から聞いた話を思い出すベーシスト。

「ああ、まあしょうがないだろ、正直音量の下げ方忘れちゃってさ」

「そんな事ありえるんだな」

逆ぎれギタリストに至極冷静に突っ込むドラマー。

ねえ音楽の神様、こんな素敵な日々をどうもありがとう。

でもちよつとやりすぎだぜ、毎晩兄貴にうるさいって言われるのはもう飽きたよ

ギタリストはただ人知れずそんな事を考えた。

ああ音楽人サイコー

4 音楽人（後書き）

こつゆう脈絡も展開も全然ないただの仲良し話好き

5 ねえジーザス

「ねえジーザス、ひとりぼっちってやっぱりいいよ」

人知れずどこかに存在する秘密の地下室で、ジーザスとは一体何なのかもわからず、ただ呟く少年。

「最後に日を見たのはいつかわからないよ、どのくらいだろう、わかるかい？」

少年以外誰もいない地下室で、問いの答が返ってくる事はない。

「ねえジーザス昔のように、正しい人の言葉がみんなの心に響けばそれはとても素敵な事なんだろうね」

昔というのがいつか、正しいとはどのような事が、みんなとは何を指してか、深くは考えず少年はただ呟く。

「ねえどこかで僕と同じように自分からひとりぼっちとなった人、同じものが好きなのに僕らは友達になれないね」

そもそも誰とも会わなければ、少なくとも言葉を少しでも交わさなければ友達になどなれはしない。

「ねえジーザス、楽しいけど、僕らみたいな人達が楽しめる世の中って何か間違っていないのかな？」

なんとなく、心のどこかではその答はわかっているのかもしれない。それでも少年は言葉に出さずにはいられない。

「世界ってまだあるのかな、明日気が向いたらだけど久しぶりに外に出てみるよ」

言いながらどうせ外なんて行かないと自分で自分の心に皮肉を吐く少年。

「ねえジーザス、僕」

そして永遠の眠りについてしまった少年。もう一週間も飲まず食わずだったのだからそれは当然の結果と言えた。

5 ねえジーザス（後書き）

深読み禁止

6 次元違い恋愛

いつからか彼女は知らない、ただ自分のいる荒れ地がかつては街と呼ばれていた事だけは知っていた。

身よりも友達も、敵さえいない彼女だけど別に寂しいとは思ってなかった。それに自分が特別ではなく、だいたいの部分で普通の人だとしてすっかり自覚していた。

毎日、食べ物を食べ、眠い時は眠り、たまに歌を歌ったり、意味もなく少しの間呼吸を止めてみたり。

「私達のこの指が絡まったらいいのにね」

「絡まっただじゃないか」

「感触がないわ」

「それは君の手が悪いよ」

一人で目を閉じ、次々呟く彼女。

「そもそも次元が違うと言いたげね」

そしてため息をつく彼女。

「確かにそんな感じもするけど、それはちよつと違うような」

彼女のいる場所とは確かに、まるで次元でも違うような場所で彼は呟く。

彼の暮らす街は普通に考えて荒れ地とは言わないだろうし、これくらいもおそらく大丈夫だろう。

「でももし想像の世界が次元違いの世界だとしたら君は本当にいるのかな」

彼はバカみたいに呟いた。

6次元違い恋愛（後書き）

こつゆうのバカな妄想とも、幸せな空想ともとれると思う

7 精霊様

とある森の水飲み場、動物達に混ざって、水を飲む人間の少年が一人。

「君はこんな所で何してる」

少年を見つけ、気になったのか声をかける旅人。

「うん、心配しなくていい、僕は人じゃない」

「聖霊様？」

「よく知ってるね」

そこで会話は途切れた。

旅人の前で少年は何とカメレオンとなったのだ。

「僕の真の姿さ、じゃあね」

そして一陣の風が吹いたかと思うと、もう聖霊様は消えていた。

「僕の声を高くしたな」

呟きため息をつく旅人。確かに彼の声は高くなっていた。

「無駄な事が好き」

聖霊様が再びカメレオンから人となった時、彼の前には偉大なる妖精王がいた。

「確かにね、人々は恐ろしい武器を作った、さっきの旅人がいくらよき心の持ち主でも少しの才能を与えただけで別に、歌を歌ってみんなの心を動かしたりはしないだろうね」

「ではなぜ？」

「簡単な事だよ、人が人を信じられない時代だから、僕らが人を信じてあげなきゃ、でなきゃ本当に人は孤独になっちゃうよ」

それからしばらく沈黙。

「どうしたの？」

「いや、君は本当に優しいなって」

「変なの」

精霊と妖精王は軽く笑った。

7 精霊様（後書き）

歌はある種、発明品だと思う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428x/>

フランソワが集めた話（短編集）

2011年11月14日14時41分発行